-IS-インフィニット・ストラトス《夜を率いる弾丸》

K.X.ツバァイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
－ＩＳ－インフィニット・ストラトス《夜を率いる弾丸》

【Ｎコード】
Ｎ６９５５Ｗ

【作者名】
Ｋ．Ｘ．ツバァイ

【あらすじ】
世界最強の兵器。通称ＩＳ（インフィニット・ストラトス）。女性にしか扱えない筈の兵器を何故か起動させた世界初の男性適合者《織斑　一夏》。そしてその一週間後、二人目の適合者《二神　黒騎》が現れる。日本政府の諜報員としての顔を持つ黒騎の目的とは…？二人の男が出会い、ＩＳ学園から彼等の物語は始まる。

登場人物設定（前書き）

原作では一巻で放棄しましたがアニメで目覚め、何故か筆をとってしまった。書くからにはやってみせるさ…！それがツバァイクオリィティィ！！でも応援してね！（ｂ＾｜。）

登場人物設定

【名前】二神　黒騎

【解説】

日本の暗部に属する若干１５歳の諜報員。容姿は金色の瞳に長めの漆黒の髪。一見は女性の様な見た目と体つきだがその内は鍛え上げられており、白兵戦ではかなりの戦闘力を誇る。

冷静、冷徹に物事を捉え、自身の意志というものに疎く、下された命令をこなす事をなによりの生きがいとしている。

二人目の男性ＩＳ操縦者として学園に入学する事になるがその目的は…？

【ＩＳ】第三世代型ー絶黒ー

【解説】

黒騎専用に開発された第三世代型ＩＳ。製造国は日本だが、開発に用いられた設計図は出所が分かっていない。同時期に開発された《白式》とは異なり、機動性を削り、重装甲大出力の機体構想となっている。その為他ＩＳより容量限界が高い。

各パーツの装甲密度は《白式》と比べ約三倍。質量を増すのでは無く密度を上げるといった手法により、機動を妨げる程の形状を避ける事が出来、重装甲にしては比較的スマートな見た目である。背に

は大口径の《月影》が固定武装として、両肩には大型スラスターを一機ずつ装備。スラスターの持続力と最高速度は《白式》に遥かに劣るが、可動時の初速はこちらの方が優れている。機体色は黒と蒼。

【装備】

‥流星

基本的なアサルトライフルの形状と機能を備え、《ヘヴィバレル》という銃口上部に備えられたリング状の火力増幅装置を持つ。通常状態では普通のアサルトライフルだが《ヘヴィバレル》を銃口へと装着する事により、火力、射程、連射速度が強化される。アサルトライフルにしては破格の破壊力を発揮するが、それに伴いエネルギーの消費量も比例し、無駄に打ち続ければ弾もエネルギーも数分で底を付く。

‥夜空

菱形の大型対物シールド。大出力に伴う負担を減らす為に本装備はエネルギーを一切使用しない見た目通りの分厚く大型な盾である。並大抵の攻撃では破壊する事が出来ず、エネルギー兵器には無敵である《白式》の〝零落白夜〟も理論上は防ぐ事が可能。重量は《絶黒》自体の約2．5倍の為、使用の際は低い機動性が更に劣悪となる。

‥蛇座（アスクレピオス）

近接戦闘装備。大剣の形状でありながら、形態変化でチェーンウィップの形状をとる事が出来る。刃の部分が分裂し、エネルギーで連結する事により近距離の接近戦から中距離への奇襲などと変幻自在の戦法が可能。

・月影

唯一の固定武装。スラスターの中心を位置取る様に背から腰へと装備されている。
大口径の荷電粒子砲。エネルギーの蓄積、充電が可能であり、最大で三段階の強化が可能。

・白夜

《絶黒》最大最強の砲戦装備。一撃を放つ為に全エネルギーの二分の一を消費とかなりの燃費の悪さを誇るがそれに見合う強大な破壊力を誇る。
砲身がレールガンとロンググレンジライフルを組み合わせた様な形状。砲身側部に《流星》を装着し、２つのグリップで固定する事によって準備が完了する。砲撃の際にもたらされる反動は《絶黒》をもってしても一撃耐えられるのみである。
まともに直撃すればシールドエネルギーが全開だろうと特殊シールドで防ごうとも一撃で戦闘不能にする事が出来るが、対象の生命を奪い兼ねない威力の為、使用には学園側の許可が必要である。

【特殊能力】

・・一瞬加速（ショートブースト）

瞬時加速（イグニッションブースト）の特殊型。初速が優秀な《絶黒》のスラスターであるから可能な技術であり、持続は無いが瞬時加速よりも早く最高速度を出せる。

連続で発動させる事により、瞬時加速よりも小回りが効き、最小限の動きで回避が可能。

しかし連続使用には使用者に掛かる負担が大きく、僅か一機体分程度しか動かないので使い所が非常に困難。

失敗をしても凌げる装甲と、次の行動に繋げる冷静な判断が無ければ只の瞬時加速の劣化版となる。

・・？？？？

起動も解析も不可能な《絶黒》の固定機能。製作した筈の日本政府はこれを感知しておらず、搭乗者の黒騎しかこの存在は知らない。完全なブラックボックスであり、現在は手の打ちようが無い状態である。

１ｓｔ　Ｂｕｌｌｅｔ『二神　黒騎』：ＡＣＴ．１《任務》（前書き）

始まりましたぁ！ＩＳ小説第一話！因みにアニメと原作を織り交ぜ、独自展開でいくんでよろしく。

1st Bullet『二神　黒騎』：ACT．1《任務》

話は一週間前に遡る。

世界最強の兵器。通称ＩＳ（インフィニット・ストラトス）。

《女性にしか》扱えない筈のＩＳをなんと《一人の男》が起動させたことからそれは始まった。

男の名は《織斑　一夏》。

事実は衝撃となって一瞬で全世界を駆け巡り、震撼させた。それもそうだ…長年揺るがなかった《世界の法則》が一瞬にして崩壊したのだから。それから世界がとった行動など簡単だ。

只の１５歳の少年が動かせたのならば、また別のＩＳを動かせる男が居るのではないか？―――という事。

そして本日９時２７分４２秒。新たに二人目の男性ＩＳ適合者が現れる。

それが…俺。

名を、《二神　黒騎》。

与えられた命令に従うしか能のない只の人形だ。

「失礼。二神　黒騎、入ります」

「あぁ…入れ」

完全に防音が施された上司の一室に足を踏み入れる。まるで苦々しいものを口に含んだかの様な表情で、デスクに座る上司は直立する黒騎に視線を向けた。

「全く…面倒な事になった…」

「はい」

貫く様な冷たい視線が、黒騎に突き刺さる。伊達に多くの人間を手綱にとる男ではある。蓄積されたキャリアと威厳が、暗い部屋の空気を重くしていく。

ここは日本政府直轄、諜報部本拠地。噛み砕くと《スパイ達の本拠地》だ。そこを統括するトップの部屋に、黒騎は呼び出されていた。

理由は明白。黒騎が世界で二人目のＩＳ操縦者となったからだ。

「この目で見ない限り信じるとは思わなかったが…それを私の部下が見せるとは予想が出来なかった」

「申し訳ありません」

「言うな。だがこれでお前の行き先はＩＳ学園となる訳だが…」

ＩＳ学園。日本に存在するアラスカ条約に基づいて作られたＩＳ操縦者専門学校。

元々はＩＳは最強の兵器だ。このような境遇の自分でも操縦が出来るとなれば政府にとってもそれは有益と成りうる。身分を偽造され、叩き込まれるのは起動した瞬間に分かっていた事だ。――――それに付随する《任務》の内容も。

「お前の任務は一人目の適合者、織斑一夏の行動の観察だ。対象に接触を図り、情報をこちらに逐一報告しろ。もしも織斑一夏が男性操縦者に成るための《何か》を知っているのなら絶対にそれを掴め。それは我々にとって多大なアドバンテージとなる」

「もしも織斑一夏に私の正体を感づかれた場合は？」

「それでも観察は続けろ。学園は我々も外部からは簡単には手出しは出来ないが内部の人間なればそこの法がお前を守る筈だ。従ってお前も目立つ行動は控えろ。…………これが学園の注意人物だ」

差し出されたのは二枚の写真だ。どちらも女性。一人は学生で一人はかなりの有名人。

《篠ノ之　箒》

《織斑　千冬》

片方はＩＳを発明した世紀の天才、《篠ノ之　束》の妹。

片方は圧倒的強さを誇ったＩＳ操縦者、《ブリュンヒルデ》。

「篠ノ之箒は篠ノ之束の親族から何かを知っている可能性が高い。織斑千冬に関しては言うまでもないな。だが織斑千冬には細心の注意を払え…奴に油断は禁物だ」

「はっ！」

「好ましい報告を期待している。二神　黒騎」

「任務………了解」

今、黒騎の運命を変える事となる任務がここから始まった。

ＡＣＴ．２《一夏、そして…》（前書き）

黒騎のＩＳ戦闘はしばらくおあずけになりそうだ〜……

――――飽きんといてな!?

ＡＣＴ．２《一夏、そして…》

俺の名前は織斑　一夏。たった今、全世界で流れまくっているであろうニュースの主役でもある。

『今日の話題はＩＳを動かした男子高校生についてです』

「なんで動いたのか俺が一番知りたいっての…」

テレビの中のアナウンサーがスラスラと読み上げる原稿に一人寂しく溜め息をつく。流石に名前までは出ていない様だが自分の事で世界が散々騒いでいると思うと気が滅入ってくる。

「しかもＩＳ学園って……」

俺がＩＳを起動させてしまった事により進路先は強制的に確定してしまった。女しか居ない学園へと。

「はぁ……」

そもそも一度しか動かした事が無いのにＩＳについての知識などある訳が無い。男で動かせるというだけで入学させられてもＩＳの勉強などについていける自信は全く無い。全く無いのだ。大事な事だから二回言った。

あぁ……なんだか憂鬱になってきた。試験の際に渡された異常に分

厚いテキストを腹いせにゴミ箱に叩き込む。なんか必読とか書いてあったけど大丈夫だろう。――多分。

『――こ、ここで緊急速報です！！ま、また新たに15歳の男性ＩＳ操縦者が現れたという情報が入りました！！』

「ッ――な、なぁ！？」

慌てたニュースキャスターの告げた衝撃の事実に手を滑らしてお茶の入った湯のみをひっくり返す。

「あっつ!?タ、タオルッ…！」

カーペットを慌てて拭きながら俺はもう一人男の操縦者が現れた事に安堵と興味を感じていた。

――白い部屋。医療機関にでも置いていそうな機械に寒気のするような赤い水滴が付着したメスやナイフがそこら中に転がっている。

そんな部屋には一人の女性が居た。白衣を羽織り、黒く長い髪の毛の妙齢の美女である。

「へぇ…やっぱりＩＳ起動出来たんだね…《黒騎》ちゃん…♪」

目の前に展開するコンソールを片手で操作しながら一人微笑を浮かべる。

だがその微笑は、人が見れば見るほど不自然で不気味で冷血なものであった。

「でもいけないよ…アナタは表の世界に出てきちゃダメなんだよ。でないと……」

真横にあった医療器具を全て叩き落とし、高価そうな機器を思い切り踏みつける。バキィッ！！とへし折れる様な音を上げ、分厚い筈の機械がへし折れる。

「壊したくなっちゃうじゃない…♪」

割れた機械の破片で切れた足から赤黒い血が流れる。

それでも、女性は微笑を消さなかった。

ＡＣＴ．３《始まりと疑惑》（前書き）

まだ原作一巻にも突入してないが安心してくれ！！

次で本気だす（キリッ

ACT．3《始まりと疑惑》

「聞こえるか二神」

「音声通信良好であります」

ＩＳ学園の上下白の制服を身に纏い、学園近くの人気のない路地裏に黒騎の姿はあった。

先程渡された携帯電話で上司と任務についての最終確認を行っていた。

「先日説明した任務内容だが少々変更点がある。一度しか言わないから頭に叩き込め」

「了解」

「織斑一夏の行動を適時報告しろと言ったがコレは変更だ。自身のデータベースに詳細に記載後、接触を許れる時に報告しろ。これは予想以上にＩＳ学園が危機察知に長けているからだ。下手な真似をして勘ぐられると面倒だ」

黒騎が使い捨ての効く駒ならば構わなかったのかもしれないが今は『世界で二人目の男性ＩＳ操縦者』なのだ。これは早々に代わりを立てる事は出来ない。

「なおお前の所属クラスは二組だ。織斑一夏とは別のクラスだがそのクラスは要注意人物である織斑千冬が担任の様だ。常に奴の視線

に晒されるのは危険だ。織斑一夏とは適時に接触しろ」

「――質問が」

「なんだ」

「自分の専用機はいつ頃に？」

世界で二人目の男性ＩＳ操縦者としての黒騎には異例中の異例だが日本政府からＩＳ専用機が用意されていると聞いている。

「現在は最終調整に掛かっている。数週間もすれば届く筈だ。なおこの専用機は任務とは別にデータ採取も兼ねている。こちらは適時報告しろ。」

「――了解」

必要事項を伝え終わると話す事は無い。通話を終えると携帯電話をアスファルトの上に捨てると躊躇も無く踏み砕いた。

二度、四度踏み、無惨な残骸とすると汚水が流れる排水口に蹴り込む。

隠滅完了。なんの感慨も無く、これからの出来事に感情の起伏も無い。

いつも通り。

俺は任務を完遂する。

「それだけだ…」

最後の一言だけ口に出すと黒騎の姿は陽光が照らす世界に消えた。

――――ＩＳ学園職務室。

「あっ…織斑先生」

黒縁眼鏡が特徴の一組副担任《山田真耶》は明らかにサイズが合っていないトレードマークを指で押し上げながら書類を片手に歩く同僚に話し掛けた。

「やぁおはよう。山田君」

「おはようございます」

切れ長の瞳に黒い髪の毛を結わえた長身のスーツ姿の女性。ＩＳ学園生徒の憧れの的、《織斑千冬》だ。

「織斑先生の弟さん…無事に到着しましたでしょうか？」

「あぁ…やたら無闇に挙動不審で登校していたよ。これからアイツが面倒を起こすと思うと頭が痛くなるよ」

「そ、そうと決まった訳では無いような気がしますけど…」

千冬の溜め息混じりの言葉に真耶は苦笑いで返すしか無い。だがその表情に、暖かい何かを感じたのは気のせいだろうか？到底本人に

は聞けないので気のせいだと勝手に納得しておく。

「もう一人の男の子も無事に着いたようです。なんだか浮世絵離れした感じの子でしたが」

「ほう…」

「それと…少し彼の経歴を見たんですが……不自然だと思いませんか？ 織斑先生」

ブック状の携帯端末を操作し、黒騎の履歴書を簡易的に表示したテキストを呼び出し千冬に渡す。

口元に手を添え、何かを探る様にテキストに目を走らせていく。

「今までの学歴は外国……詳細は国側が情報漏洩を防ぐ為に拒否。両親は不在…国からの補助金で一人暮らし……」

確かにある程度の情報はあるが全てが詳細に示されていない。そして何よりも一番の違和感はその理由全てが『完璧過ぎる』という点だ。

まるで穴が無い。それが不自然さを呼ぶ。

「…二神　黒騎………か…」

テキストに記載されている証明画像を見る。

まるで──意志の無い人形の様だ。

冷たく光る金色の瞳を見て、千冬はテキストを閉じた。

ＡＣＴ．４《一年二組・百合ちゃんはこういうポジションです》（前書き）

オリキャラ勢二人目登場。

ACT．4《一年二組・百合ちゃんはこういうポジションです》

（…やはり注目は集めるか…）

ＩＳ学園一年二組。クラスに着いた黒騎を待っていたのは女子達の好機の視線であった。
黒騎の席は真ん中の席の前から三番目。

つまり『超』ド真ん中。

前から横から後ろも女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子…――ｅｔｃ．

「――――ん…」

（そこまで男が珍しいのか…？しかしこれは予想以上に動きにくくなるな…監視カメラが学園中に張り巡らせられているようなものか…）

「――――君…」

（ひと月もすれば多少は和らぐか………いや、可能性は薄いな。どちらにせよ織斑一夏と接触を計らなければならないな。機会は……………………ん？）

「二神　黒騎君！？無視なの！？あえて無視してるの！？」

…マズい。俺とした事が考えに没頭し過ぎていたようだ。わざわざ教壇から目の前まで来ている涙目の赤縁眼鏡の担任にクラスの女子が同情の視線を送り、黒騎には『いやアンタ早く反応したげなよ』的な言葉が表情で見て取れる。

「……スミマセン。少し緊張していて聞いてませんでした」

「そ、そう。初めての男性操縦者ですものね！き、緊張するのは仕方ないわよ！わ、私が気に入らなくて無視したとかじゃないのよね…？」

「はい？」

「百合ちゃんネガティブ過ぎ！」

「二神君が困ってますよ～」

「でもそれでこそ百合ちゃん！今日初めて会ったけど！」

本日初対面である筈の生徒から既に舐められている哀れなこの担任は《四宮　百合》は涙目で慌てている。

「き、教師をちゃん付けで呼ばないで下さい！」

黒髪を結い上げてスーツ姿の百合ちゃんこと四宮先生は助けを求める様に黒騎へと目を向ける。

「自己紹介をすればいいんですね？」

「う、うん！じゃなくてそうね！それじゃあお願いね！」

危なげな足取りで急いで教壇へと戻ると今度は周りの女子達と同じ奇異の眼光で射抜いてくる。

……面倒だな。

そう思いつつもゆっくりと席を立ち、短く息を吸うと吐くと共に口を開いた。

「二神　黒騎だ。どうやら俺は世界で二人目らしいんだが…ＩＳについては全くの素人だ。基礎は覚えているつもりだが目に余る所などがあればご教授してもらいたい。以上だ…一年間よろしく頼む」

頭を軽く下げ、席に着く。

同時にクラスは喧騒に包まれた。

「イケメン？って言うより美少年だよね！」

「うわ…肌綺麗……私より…へこむわぁ…」

「クールキャラキタァァアッ！！」

「黒髪に金眼！！ハーフ！？ハーフなの！？」

…………何故だ。言われた通りに自己紹介をしたのに余計騒ぎが大きくなってしまった。日本の女はよく分からない…複雑な女心とい

うやつか？それにしても織斑一夏とはどう接触するか…。

「新学期早々のホームルームで何でこんな事になるのよ！？二神君……無視！？というか寝てる！？」

……寝てはいない。目をつぶっていただけだ。

「もう…もう……ホームルームを終わりますっ！？うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！？」

百合ちゃんが号泣しながら出て行った。

『…………………』

やっべやり過ぎた……どうすんのアレ…。

黒騎以外の全員が心の中でシンクロしたという。

ACT．5《邂逅》（前書き）

一夏と遭遇。暫くは日常編～

ＡＣＴ．５《邂逅》

放課後。

何故か他クラスの女子までもがクラスの外から黒騎を一目見ようと混雑しまくっている。クラスの女子は女子で誰が一番に話掛けるか牽制しあい、結局誰も黒騎とは会話すら無い。

そのお陰で考えに没頭出来たが一般人にはこの視線は辛いのでは無いのだろうか？自分を見てキャイキャイと騒ぐのを見ると動物園の動物にでもなった気分になってくる。

俺は知らないが。

「さて……」

腰を上げる。分厚いＩＳ教本の入ったカバンを肩に担ぎ、出口へと向かう。

「すまない…通してくれ」

「は、はい！」

そこに屯っていた女子達に一声掛け、どいてもらうとこれまた女子女子女子女子女子女子。黒騎が出て来たのが分かると道を空ける様に一斉に左右に広がる。

その中心を何食わぬ顔で歩くと直ぐに目的地には着いた。
一年一組。何しろ隣だ。ここに織斑一夏が居るはずだ。

「失礼…入るぞ…」

「うう…」

千冬姉に活を入れられ気合いを込め少しでもＩＳの知識を覚えようと思ったのだが一夏は見事に絶望にうちひしがれていた。

「い、意味が分からん…なんでこんなにややこしいんだよ…」

机の上に広げられたＩＳ教本の活字の羅列に頭がオーバーヒート寸前。まぁまだそれはいい。問題は『勢いに身を任せて何故かイギリス代表候補生セシリアと決闘をすることになった』という点だ。

「マズいなぁ…どうするかなぁ…」

………まぁなんとかなるか。

とりあえず今はこの女子の視線から逃れたい。教室は勿論、左右の入り口にも女子が――――――――女子？

「少しいいか…？」

「お、おう…――って男！？」

男が居た。やたらと細く中性的な顔付きだが正真正銘男だ。

「あ…あぁ！お前か！もう一人のＩＳを使える奴は！？」

「そうなるな」

ニュースで騒いでいた『二人目』。ＩＳ学園に入学していると聞いていたので速攻で会いにいくつもりだったのだが、幼なじみの箒やセシリアに絡まれたせいですっかり忘れていた。

「会いたかった…超会いたかった！」

「そ…そうか」

俺は今どんな表情をしているんだろうか？初対面なのに若干引かれてるんだけど。だがしかし！そんな些細な事はどうでもいい！

「俺は織斑　一夏だ。よろしくな！」

「二神　黒騎だ。こちらこそよろしく頼む」

今は同士が出来た！それだけで充分だ！！！

「織斑君の目が輝いてるわ！？まさか彼に興味が…！？」

「まさかのライバル！？いやでも…あの組み合わせいいかも…」

「織斑君が『受け』ね」

「二神君がクールに苛める訳ですね。分かりますごちそうさま」

…………あっれー？なんか変な誤解が……。

数分後、教室に千冬姉と山田先生が来るまで寒気のする女子達の腐談は終わらなかった…。

ACT.6《予想外》（前書き）

あぁ……戦闘まだぁ？　みたいな顔で見ないでくれぃ（╭◯╭；）

ＡＣＴ．６《予想外》

「あっ織斑君。まだ教室に居たんですね。良かったです」

一夏との挨拶を終えると丁度副担任の山田先生が書類片手にやってくる。

山田真耶。恐らくは織斑千冬がこの学園内でもっとも信用している人物だ。性格は弱気だがことＩＳ戦闘に関しては元代表候補生というだけの事はある。

真耶の簡易的なプロフィールを頭の中から呼び出して千冬に次ぐ注意人物と判断する。

「あっ…アナタは」

「二神　黒騎です。よろしくお願いします…山田教諭。」

「え…ああ！山田真耶です。こちらこそよろしくお願いしますね」

「はい」

一瞬黒騎の事に驚いたようだが微笑んで挨拶を返すと何か思い出したかの様に２つのキーと部屋番の書かれた紙を取り出した。

「えっと…お二人の寮の部屋が決まりました。本来は二神君は四宮

先生から渡してもらう予定だったんですけど…四宮先生体調が悪いそうで保健室でお休みになっているので私から渡しますね？」

「分かりました」

百合が保健室行きになったのは間違い無く黒騎と二組のせいだが一夏と真耶はそれを知る由もない。というか黒騎もわかっていなかった。

「俺の部屋決まってないんじゃなかったですか？一週間は自宅から通学してもらうって聞いてましたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。…織斑君、その辺りの事何か政府から聞いてます？」

最後の一言だけ周りの女子に聞こえない様に黒騎と一夏にだけ聞こえる様に小声で話す。

黒騎も全てを把握している訳では無いが、今まで前例の無い『男性操縦者』なので保護と監視の意味合いで寮に入れておきたいのだろう。学園にいればある程度の安全は保証される。そして『監視』の役目を担うのが黒騎だ。

一夏と同室になれば観察もし易くなる。実際二人以外は全員女だ。道徳的にも二人が同室なのは妥当だと言える。

……そう、聞いていた。

「そういう訳で政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先

したみたいです」

「アレ？相部屋なのに俺と二神は別の部屋なんですか…？」

「何…」

一夏の呟きに黒騎が自分の部屋番と一夏の部屋番を見比べる。部屋が近い所か少し離れている程だ。

「それも政府からの要望なんです。織斑君と二神君を同じ部屋にしないように…と」

「えぇ！？男がわざわざ二人居るのに部屋が別って…」

意味が分からない。そう一夏が呟くがそれは『別の意味』として黒騎にとってはそうだった。

（どういう事だ…指令書には『織斑一夏と同室になる様に取り計らう』、という手筈になっていた筈だ）

任務一日目から早くも予想外の事が起こる。学園側が何かしらの理由で部屋が別になるなら納得は出来る。だが『政府からの要望』となれば全くの別だ。何故ならばそう指示していたのは日本政府そのものなのだから。

「……確かにおかしいとは思うが学園からそう言われたのなら従うしかないさ」

「うーん……まぁいいけど…」

言葉とは裏腹に納得出来ないのは黒騎本人だ。最も本部と連絡が取れない今は理由を知りようが無い。

一抹の不安要素を抱きながらも黒騎は自室へと向かった。

ACT.7《暗躍》(前書き)

一応一夏ははぶり過ぎない予定です

ACT．7《暗躍》

黒騎が予想外の出来事に会っていた数時間前の日本政府諜報部本部。黒騎の直接の上司、諜報部を率いる初老の男と白衣を羽織った黒髪の妙齢の美女が狭い部屋に二人で居た。

「どういうつもりだ…！」

「えーっ？どうって何が？」

デスクに座った男が怒りを露わに目の前に立つふざけた態度の美女を睨み付ける。

「とぼけるな…二神　黒騎の任務に決まっているだろう！！貴様…独断で学園側に指示をしたらしいな…！」

「独断じゃないよぉ？ちゃーーんとお上の偉い人に許可も貰ったしー？」

「諜報部のボスは私だ！！勝手な事をするなっ！！」

「クス………………………………君さぁ……あまり勘違いしないでくれる？」

瞬間。怒りに染まっていた男の表情が凍り付いた。

そこに描かれたのは単純な『恐怖』。

人とは到底思えない程の冷たい微笑。

極寒の地に放り投げられた様に男の全身が震えた。

「私がの気が変わっちゃうとさぁ…日本政府なんて直ぐになくなっちゃうよぉ〜？」

「ッ…」

「まぁ許してあげる。でもソコの席は君のポジションじゃないんだよね〜」

「なっ！？」

美女の言葉を待っていたかの様に、部屋の扉が勢い良く開かれ、二人の黒服が入って来る。二人共男の部下だ。

「ご苦労様〜。んじゃ連れてっちゃって」

「き、貴様ら！どういうつもりだっ！！」

黒服達は答えない。無言で男の両腕を捕らえると強引に出口へと引きずっていく。

「これからは私がここのボスさんだから安心して君は退職してね〜」

「ば、バカな…！」

「バカじゃなくて天才だよ？」

「っ…貴様アァァァァァァァァァァァァァァッ！！！」

「はいはーい！それじゃあバイバーイ！」

絶叫の余韻を残し、男は黒服に連れて行かれた。部屋には美女が一人残るのみ。

鼻歌混じりで男が座っていたデスクに腰を下ろすとまた冷たい微笑を浮かべた。

「黒騎ちゃんで遊んでいいのは私だけなんだよ…」

クスリ…、と女性の声が冷たく響いた。

１０４2号。ここが黒騎のＩＳ学園での家となる場所だ。

キーを差し込み、中に入ると一人で使うには勿体無い位の立派なベットとデスクが二つ有る。どうやら一夏は女子生徒と同室らしいが黒騎は一人だ。

これは都合がいい。一夏に常に張り付いている事は出来なくなったものの、情報を整理するにはルームメイトは居ない方がいい。

白い制服を脱ぎ捨て、シャツのボタンを二つ外してベットに身を投げ出す。上等な品質の天井を見ながらカバンから直径１ｃｍのメモ

リーカードとこれまた小型の携帯端末を取り出して起動させる。三重のロックを解除し、メモリーをセットしてデータを呼び出す。

「一週間後に代表候補生と決闘…か」

イギリス代表候補生（セシリア・オルコット）。
専用IS（ブルー・ティアーズ）。

イギリスの開発した第三世代実験機。多方向、同時攻撃を可能とするオールレンジ攻撃と高出力のレーザー兵器に主軸を置いた射撃特化機体。機体名の由来となる特殊兵器（ブルーティアーズ）を装備する。

「…織斑一夏のISはまだ届いていない……勝率は極めて低い……と言うよりこれは無謀だな」

一夏の専用ISの能力によってはいい勝負をするかもしれないが相手は代表候補生。その名を持つに相応しい実力を持つのが代表候補生なのだ。

無知ゆえの無茶か。

それとも勝つ算段が既についているのか。

どちらにせよ一週間後の試合を見れば分かる筈だ。

「ッ……」

瞬時に端末を切り、カバンに放り込みドアへと気配を消して駆け寄る。

ガッ！！！

『へぶっ！？』

「………は？」

勢い良く開けた先には二組で見た女子生徒数人が顔を抑えてうずくまっていた。

「………すまない」

謝らなくていいと思うが一応謝っといた。

ＡＣＴ．８《鈍い男》（前書き）

お待たせしました～

次はクラス代表決定戦！因みにまだ黒騎の出番はまだ（笑）

ACT．8《鈍い男》

翌日。右も左も女子の中でも至って平常心を保つ黒騎は食堂に居た。時刻は昼、黒騎と同じく昼食を目的に来た生徒達でざわついている。空いているテーブルを見つけ、適当に食事をとっていると黒騎の学園での任務対象二人がやってくる。

「よっ、二神」

「…ん、織斑か」

「…………」

一人は言うまでもなく織斑一夏。もう一人はやけに機嫌が悪そうな観察対象の篠ノ之　箒だ。解けば足元位までありそうな黒い髪を白いリボンで頭上に結わえ、切れ長の瞳、無駄の無い引き締まったスタイルが箒の迫力を後押ししている。

「座るか…？」

「ああ、丁度席が無くて困ってたんだよ。なぁ箒」

「…向こうが空いていただろう…」

「ん…そうか？でもみんなで食べた方がいいだろ」

「ああそうだな！！」

「なんで怒ってんだよ…」

黒騎の隣に一夏、箒と並んでテーブルに着く。機嫌が悪い箒を宥めようと一夏が奮闘しているのを見て不意に疑問がよぎった。

「お前達は付き合っているのか？」

「なっ！！！？そそ、そんな訳があるか！！！」

「そうだぞ。俺と箒は幼なじみだ」

「………………」

どうやら違ったようだ。見た感じはお似合いだったので言ってみたが検討違いにも程がある。男と女の好意などは分かる気がしない。現にヘタな事を言って箒を怒らせてしまった様だ。

「ところで黒騎って呼んでいいか？ここでは二人だけの男同士なんだし仲良くしようぜ」

「ああ…好きにしてくれ」

「俺も一夏でいいぞ」

「…慣れたらそう呼ばせてもらう」

「おう。ところで箒…ＩＳの事教えてくれないか？このままじゃ来

週の勝負で何も出来ずに負けそうだ」

(黒騎…か…)

コイツは俺の事を何も知らないくせに疑う事もしていない。だが…『俺の正体を知った』時、織斑一夏は一体どんな反応をするのだろうか。

(…下らないな)

それを言葉にする事なく、黒騎は心の中で小さく呟いた。

「そこのアナタ！少しよろしくて？」

「イギリス代表候補生…セシリア・オルコットか…」

煌びやかな金色の巻髪にイギリス人特有の青い瞳。男という生き物を見下したかの様な高慢な態度。それが黒騎の抱いたセシリアの第一印象だ。

「あら、もう一人と違ってアナタはちゃんと礼儀をわきまえてますのね」

「代表候補生の名など『嫌でも』耳に入る」

「い、嫌でもってアナタ…！」

ん…？　何か気に障る事を言ったのか俺は？　やはり日本語は勉強不足だな…永らく日本には不在だったため慣れていないのだ。

「気に障ったのなら謝る…すまない」

「ま、まぁいいでしょう、わたくしは寛大ですからそこまで言うのなら許して差し上げてもよくってよ」

そこまでと言われる程の事はしていないと思うが……こいつはもしかして一周回ってバカという奴か？日本文化の研究用に購入した本にはこういう奴をそう呼ぶと書いていた。

「それにアナタはあの『もう一人』とは違って利口そうですし…この優秀なわたくしに聞きたい事でもあれば教えて差し上げてもいいですわよ。わたくしはトップクラスの『Aランク』なのですから！」

セシリアの言っているのは入学試験の際に受講者の格付けの事だ。因みに織斑一夏はB、篠ノ之箒はCと聞いている。

「悪いが今現在の時点で必要な知識は頭に入っている。お前も『同じランク』の奴よりもっと他の奴に教えてやったらどうだ…織斑や篠ノ之辺りに――」

「アナタ何て仰いましたの!!!?」

セシリアの絶叫が、黒騎の言葉を言い切る前に遮った。

（うるさい女だ…耳が痛い…）

「わたくしと同じＩＳランクだと言うの！？男のアナタが！？」

「……お前は男を舐めすぎだな…確かに今の世界で男は弱い存在だ。だが誰もが同じだとは思わない事だ」

「な…！」

「せいぜい織斑一夏に足元をすくわれない様にな」

白い肌を真っ赤に染めたセシリアに背を向け、黒騎は一週間後のクラス代表決定戦に意識を向けていた。

ＡＣＴ．９《クラス代表決定戦観察？》（前書き）

う～ん…ＩＳの表現って難しいなぁ…（笑）

ＡＣＴ．９《クラス代表決定戦観察？》

そして月曜。一夏とセシリアの決闘当日。

一時的に貸切状態のアリーナの観客席の所に黒騎は居た。右隅の左上の柱に背を預け、黒騎の視線はアリーナ中心を浮遊しているセシリアに向いていた。

「…ねぇ…彼がもう一人の…？」

「やっぱ強いのかな…？」

目立たない様に端に居たのにやはり周囲の女子生徒は黒騎を見てヒソヒソとそれぞれ呟いている。

しかし幾分鋭い目つきでアリーナを見る黒騎に話し掛ける女子生徒はおらず、黒騎は頭のデータとセシリアのＩＳを比較していた。

光沢のある青色のＩＳ（ブルー・ティアーズ）。機体の代名詞とも呼べるフィンアーマーを四枚背に携え、腕、腰、脚はこれまた『青』の装甲で包まれている。右腕には約二メートル超の銃身にスコープが装着されたレーザーライフルが握られている。

「ん……来たか」

セシリアの向かいのピットから白い装甲を持つＩＳが飛び出してくる。

「あれが……《白式》」

二つのスラスターを背に、鋭角的な装甲を纏ったブルーティアーズと比べてシンプルな形状だ。

「固定装備は無し……恐らくは近~中距離型か…」

こう言っては何だが見た目の時点で同じ専用機では差がある様に見える。

「データベースには白式の名しか無かった…特殊な能力でも有るのか…？」

そうこう考えている内に、アリーナの中で閃光が走った。。

正確にはセシリアのライフルが開始早々一夏を撃ち抜き、衝撃によって肩の装甲を砕き、大きく吹き飛ばした。

「……迂闊過ぎる」

そこからは一方的な、ワンサイドゲームが始まった。アリーナの下部へと吹き飛ばされた一夏を待っていたのはセシリアの容赦無い狙撃の雨だ。

レーザーライフル《スターライトｍｋ．？》から次々に閃光が迸り、白式のシールドエネルギーを削りとっていく。

「口だけでは無い…という事か」

まだ未熟とはいえ縦横無尽に飛び回る一夏に次々と命中させるセシリアの技術は流石の一言に尽きる。

一夏が右手を降り翳した。物質が構築され、その手には一振りの刀の形を模した近接型ブレードが握られている。

「射撃装備が無い…！？武装はアレだけということか…！？」

この状況であの選択をしたという事は白式の装備があの刀一振りだけという事だ。今時射撃装備を持たない機体など無い。特化機体は有るがそれでも最低限の対応が出来る様になっている。あまりにもピーキー過ぎる。

そう考えている間にも試合は動く。

ブルーティアーズの四機のフィンアーマーが射出、ビットそれぞれに設けられた銃口が全方位から一夏に火を噴いた。

回避、回避、着弾、回避、着弾、着弾、回避。多角的な動きでビットからのレーザーが一夏の隙を作り出し、そこをライフルで撃ち抜いていく。

「これは…誘いか…？」

四度目の同じパターンを見てセシリアの狙いを察する。セシリアはワザと同じ戦法をとっているのだ。

『決定的な一撃を入れる為に』

白式のブレードが閃いた。全く同じ箇所からの射撃を避け、二機のビットを両断する。爆散するビットを追い越し、セシリアにブレー

ドを振り下ろすが飛び退き回避される。

「……完全にセシリアの策にハマっているな…」

一夏は気付いていないだろう。ここからは表情までは見えないがきっと偽りの目前の勝利に興奮しているに違いない。

「ちっ…」

思わず舌打ちをする。あそこまで迂闊な男を自分がわざわざ監視しなければならない事実にだ。詰まらない観察対象ほど苛立ちを覚えるものは無い。そして黒騎は興味を無くすのだ。人間らしい感情を消去して任務を完遂する只の人形になる。

（…そんなものか…所詮は…）

頭の中が一気に冷たくなっていく。

それと同時に、セシリアの腰部の砲口からミサイルが放たれ、間抜けな一夏に直撃する。爆煙が白式と一夏を包み、それは試合の終了を意味していた――――――――筈だった。

ACT．10《クラス代表決定戦観察？》（前書き）

二話連続投稿だよ！！次からとうとう黒騎の専用機らへんの話！

ACT．10《クラス代表決定戦観察？》

それは良い意味で黒騎の期待を裏切った。

「なんだと…！？」

黒い煙幕が薄れていく。

試合はまだ終わっていなかった。

純白の機体が現れると共に。

「一次移行(ファーストシフト)…！まだ最適化が終わっていなかったのか…！」

ＩＳには最初の起動時に初期化と最適化を行う必要性がある。それらは実際に稼働し、動かし、ＩＳ自体が搭乗者にもっとも適した調整を行い、それらのステップを踏んで漸く《専用機》となるのだ。

専用機となった《白式》は全く形状が違った。
スラスターは大型化され、その形状は翼を彷彿とさせ、機体は美しいと思える程の純白と流麗なフォルムと化している。まるで中世の鎧だ。右手に握るブレードも太刀の様な反った刃に、微かに光が溢れている。

「都合のいい奴だ…だが…」

運も実力の内…か…。

誰にも聞こえる事も無く、黒騎の口から言葉が漏れる。

どうやらまだ、感情を消す必要はないようだ。

先程とは全く違う視線で、黒騎はアリーナへと再び目を向けた。

織斑一夏は負けた。結論ではそうなる。だが黒騎には落胆といった感情は抱いていなかった。

(詰まらない観察対象程詰まらないものは無い…が、逆もまた然りか)

自室に戻り、黒騎は本日の報告書を携帯端末を起動させ、まとめていた。

「戦闘技術も二回目起動にしてはかなりのセンスだが…少々詰めが甘い所が見受けられる」

言ってみれば今日は観察のしがいが有ったと言えよう。戦闘技術、ＩＳ、戦法などなど貴重な情報が手に入ったのだから。携帯端末を閉じ、予め煎れておいたコーヒーを一口飲む。

「まだ…退屈はしなくて――――――ん…？」

控えめにドアを叩く音が部屋に響く。時刻は9時…来客には少々遅い時間帯だ。今時の女子は違うのかもしれないが。

「今開ける…」

「あっ…夜遅くにごめんなさいね」

「四宮教諭…」

ドアを開けた先にいたのは一週間前に初日早々生徒に泣かされた百合ちゃんこと四宮先生だった。

「どうかしましたか？」

「明日の朝でも良かったんだったけど…慌てて準備する事も無いだろうと思って」

「…と言うと？」

「織斑君とは1日違いになるけど明日、アナタの専用機が届く手筈になっているの」

「俺の専用機が…？」

正直黒騎としては任務には関係ない専用機の事は頭の片隅にあった。何日遅れようが構わなかったのだが政府は自分のデータも欲しいらしい。

「所々調整の必要があるみたいだから明日の朝6時に第二アリーナのBピットに来てくれる？」

「分かりました」

「急にごめんなさいね…それじゃあ――――――」

「あ――――――――っ！！！！！百合ちゃん先生が二神君に『夜這い』してるぅ！！！」

『なぁんだってぇぇえっ！！！！』

一人の女子生徒の絶叫に応える様に周りの扉から次々にパジャマ姿の二組女子達が飛び出してくる。

「な、なに言ってるんですかアナタは！」

「激写！ＩＳ学園の生徒Aは見た！生徒と女教師の禁断の愛！」

「あぁダメよ二神君！何故なら私とアナタは生徒と教師！」

「何を今更言っているんだい…？君が僕無しで生きていける訳がないだろう…？」

きゃあきゃあと騒ぎ出す思春期の女子達。でっち上げの三文芝居まで生徒まで居る。

「……ではお休みなさい…四宮教諭…」

「えぇっ！！？この状況を私に丸投げしちゃうの！？あっちょ！

？」

「自分…明日早いので」

「あぁもう！？なんで私のクラスはこんなに騒がしいのぉ―――――――――――――――っ！！！！？」

パタリと閉じられる扉。

百合教諭がからかい外のある人物だからとは言わない方が言いだろう。

あと二組がお祭り騒ぎの大好きな奴らばかりだと言うのと。

それから騒ぎが収まって百合ちゃんが疲れ切って帰路に付いたのは３０分後の事だった。

2nd Bullet『予期せぬ来訪者』ACT．1《黒いＩＳ》（前書き）

漸く黒騎のＩＳ登場！展開早いとは言わないで！

2nd Bullet『予期せぬ来訪者』ACT．1《黒いＩＳ》

そして翌日。

一分の遅れも無く6時丁度に黒騎はアリーナのピットへと訪れていた。

「おはようございます、四宮教諭」

「…おはよう……二神君…」

何時ものスーツ姿とは違い、灰色の作業服を着た百合の目元には深い深いクマが刻まれている。

「フフ…フフフ……結局寝れなかったわ…」

(苦労してるんだな…この人)

密かに百合ちゃんに同情しながらも、黒騎の心は中心に立つ『黒』のＩＳに向いていた。

「これが…」

「そう、これが二神君の専用ＩＳ」

――――――《絶黒》

絶体的な漆黒のＩＳが、そこには居た。

そして数日が経った頃、一夏の姉であり今は織斑先生となった千冬の授業をアリーナにて黒騎は受けていた。

何故一組の担任の千冬の授業を二組が受けているのかと言うと百合の担当教科が『整備』だからである。なのでＩＳを使用した実技では主に一組と共同となるらしい。黒騎としては願ってもない。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、それに二神。試しに飛んで見せろ」

「はい！」

凛とした返事の後、意識を集中させる様に目を瞑ると一拍おいてセシリアがブルーティアーズを展開させる。流石の展開速度だ。

「…………」

セシリアに習って目を閉じる。真っ暗な視界の先に浮かぶ更に濃い『黒』。

————絶黒、起動。

瞬間、左手の人差し指に嵌められた黒い宝石をあしらった指輪から光が溢れた。粒子が黒騎の全身を包み、それに適した形へと再構築する。時間にして0．6秒。二神黒騎の専用機、『絶黒』が姿を現していた。

背には二つのスラスター、その中心に背から腰にかけて一丁の砲身がある。所々の装甲は鋭角的なフォルムでブルーティアーズや白式と比べると『鋭い』印象を抱く全身黒のＩＳ。

黒と対を成す様な白のＩＳを一夏が展開したのはそれから一秒後にも満たない時間だった。

「よし…飛べ」

セシリアと黒騎が同時に天へと飛翔する。一拍おいて一夏も飛ぶがその速度は二人に比べてかなり遅い。

「遅い！スペック上では白式が一番上だぞ」

「そう言われても…」

千冬の激に一夏がげんなりと呟く。

「自分の前方に角錐を展開させるイメージだっけ…？うわぁ…わかんねー…」

「イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもなぁ…。黒騎はかなり楽に飛んでるよな…コツでもあるのか？」

「……言ってもいいが恐らく余計に分からなくなるぞ、多分」

「………やっぱやめとく」

因みに黒騎は『自身の身体を◯◯メートル移動させる』といったイメージで飛んでいる。複雑怪奇な計算を頭で演算し、約数時間でここまで操れる様になったがこのやり方は一夏には合わないだろう。黒騎が理屈型なら一夏は感覚型なのだから。

鮮やかな金髪を風に揺らし、照れくさそうにセシリアが初めとは打って変わった態度で口を開く。

「その…よろしければ放課後に指導して差し上げますわよ…？」

「はっ…？」

「…その時は二人きりで…」

明らかにセシリアから一夏への態度が変わっていた。男の黒騎にはセシリアの心境の変化など分かるわけもないが微かに興味はある。

（この後聞いてみるか…）

「三人とも！急行下と完全停止をやってみせろ」

「り、了解」

割って入った千冬の声に少し慌てながらも返事と同時にセシリアが地表に向かってスピードを上げた。

「次、行くぞ」

一夏に一言断ってから黒騎がそれに続く。因みに落下時や上昇時のスピードは絶黒がダントツのビリだ。セシリアがギリギリの所でブーストを逆噴射し、何の問題も無く着陸に成功する。

それに対して黒騎の絶黒はホバーリングの要領で地表を滑り、勢いを殺す。

「まずまずだ。だがもっと滑空距離を縮めろ」

「了解」

二人に続いて一夏が――――――――――地面に見事に激突した。

「………見事だな」

思わずそう呟いてしまう程の大穴を見て黒騎は呟いた。

ACT.2《三人目》（前書き）

鈴登場～～（￣◯￣；）

ACT．2《三人目》

懇願する一夏に折れた黒騎は一夏の空けた大穴に土を放り込んでいた。

「悪いな…黒騎。手伝ってもらって」

「気にするな、問題無い。それに同じクラス代表だからな」

「はは…ありがとな」

言葉の通り、何故か黒騎は二組のクラス代表となっていた。因みに知ったのは一昨日だ。黒騎が絶黒の調整に出ている間に決まったらしい。なるべく目立つのを避けたい黒騎からすればなんとも迷惑な話だ。

「そういやもうすぐクラス対抗戦だなぁ…俺と黒騎が戦う事もあるかもな」

「その可能性はあるな……しかし急行下の出来ない奴には負ける事は無いと思う」

「ぐっ…！？お前やっぱ怒ってるのか…！？」

「…？？何故だ…？」

キョトンと首を傾げる黒騎に一夏は盛大に溜め息を着いた。

「いや…もういいや…」

「そうなのか？では早く終わらせるぞ…」

「ハイハイ…」

コイツ少しズレてんのかな…？と一夏が心の中で呟いたのを黒騎が知る由もなかった。

夕方。太陽が地平線へと半分程沈んだ頃に、ＩＳ学園の１Ｆ廊下を黒騎は歩いている。全身水着の様なＩＳスーツの上に学園指定のシャツとズボンを着ただけのラフな格好でアリーナへと向かっていた。理由は簡単だ。今から数分後に特別に３０分だけアリーナを貸し切る事が出来るのだ。普通は学園に許可を申請し、相応の理由が無ければ許可は下りないのだが今回は特別だった。黒騎のＩＳ《絶黒》の最終調整がまだ済んでいなかったのだ。せっかく専用機を作ったのにこれではマトモなデータも取る事が出来ない為に百合が許可を取ったのだ。割と頼れる人なのかもしれない。

「しかし調整にも時間が掛かりすぎだ…」

《絶黒》が届いたのは良かったのだが問題は言葉の通りかなり調整に時間が掛かってしまった。聞いた所によると他のＩＳと比べて絶黒の武装は特殊らしい。実際に使用して誤差を修正しなければ使い物にならないものだらけという事だ。ＩＳはまだ未完成と言われているが絶黒にこそこの言葉はふさわしいんでないかと思う。

「織斑一夏って何組ですか？」

不意に微かに苛立ちを含んだ少女の声が聞こえてきた。

「ああ、噂の子ね？一組よ。凰さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

どうやら事務所の女性従業員に何か聞いていているらしい。それにしても学園の制服を来ているのに一夏の事を知らないとは奇妙であった。

まぁ自分には関係ないと何事もなく通り過ぎようとした時。

「二組のクラス代表って決まってますか？」

「ええ。丁度後ろに居るわよ」

「えっ？」

少女が振り向いた。明らかに自分を見ているので素通りする訳にもいかず、黒騎は足を止めた。

「……何か用か？」

「あぁ…アンタね？もう一人の男の操縦者って言うのは」

「まぁ…そうなるな…」

小柄な体系に黒い艶のある髪の毛を左右それぞれに結び、少しつり

上がった瞳は僅かに日本人とは違う色をしている。し、か、し、可愛らしい外見とは打って変わって少女の態度はデカい上に無遠慮だった。

「私とクラス代表を変わりなさい！」

……いきなりな女だ。黒騎は真っ先にそう思った。

ACT．3《黒対龍？》（前書き）

バトルだぁ…バトルだよぉ……――――まだ始まってないけど（マテ

ACT．3《黒対龍？》

『あのぉ……これは一体どういう状況なんです？』

「調整を手伝ってくれるそうです」

『は、はぁ…』

第二アリーナ。何故かいきなりクラス代表を変われと言われた黒騎は少女と共にアリーナ中心へと来ていた。聞くところによるとこの少女、二組への転入生らしい。

しかもどこかで見たことのある顔だと思えば少女は中国代表候補生、『凰　鈴音』だった。

別に変わる事には何の不満もなかった黒騎だがどうせならと条件を付けた。

今から30分、ＩＳを用いての模擬戦に付き合えと。

「ふっふーん。まぁそれ位いいけど怪我させないようにやるのも面倒だから手加減しないわよ」

「問題ない。むしろ本気で来い」

「ふん…いい度胸してるじゃない！」

……みたいやり取りがあったのでこの状況を作り出すのは簡単であった。

『凰さんも二神君も一応はクラスメイトなんですからお互い無茶はしすぎないでね？』

絶黒の内部通信から百合が心配そうに言うが既に黒騎の耳には入っていなかった。

「それが第三世代ＩＳ《甲龍》か…」

読みはシェンロン。鈴音が身に纏うのは中国の最新鋭機だ。全体的に龍の手足を彷彿とさせる赤紫色の装甲に、肩には円球型の特徴的な浮遊ユニットがそれぞれ一機ずつ。両手には青竜刀を模した巨大な剣が握られている。

(ブルーティアーズ程情報が無い……あの円形のユニットが何かありそうだな…)

「ええそうよ。アンタのそれも日本の最新鋭みたいだけどいきなりスクラップにされたからって泣き顔見せないでよね！」

「御託はいい…」

黒騎が左手を翳す。

―何者をも叩き斬る巨大な、鋭い刃―

光が粒子となって飛び散る。一瞬後には絶黒の全長をも超える超巨大な西洋剣。

《アスクレピオス》が握られていた。

「始めよう」

そして百合の掛け声により、黒騎と絶黒の初めての戦闘が始まった。

「ふむふむ…ようやく黒騎ちゃんの所にも専用機が届いた…っと」

空間に出現したモニターを手元のコンソールで操作しながら日本政府の一室にて白衣の美女は唇を吊り上げた。

「絶黒…かぁ…真っ黒の黒騎ちゃんにはピッタリの機体だねぇ～」

絶黒の開発過程、そしてその元となった設計図案を呼び出す。只の凡人には到底思いつかないエネルギー転換機構、既存のＩＳを遥かに上回る破壊力の武装の数々。ＩＳ技術者がコレを見ればすぐさま引き抜こうと躍起になる程の技術がこれにはある。

だが、

「設計者はふ・め・い・かぁ…」

設計図案を提供した人物はまだ判明していないのだ。ならばこの設計図案も得体の知れないものとなるのだが、開発許可を下したのはこの美女本人であった。上層部のお偉いさんと『話し合った』結果だ。

「私に対する当て付けかなぁ…ねえ…」

ミーシャ…。

その名が誰かは、美女しか知る術は無い。

今は。

ＡＣＴ．４《黒対龍？》（前書き）

戦闘戦闘～（￣∀￣）

ACT．4《黒対龍？》

「さぁ行くわよっ！！」

「シッ……………！」

同時。二機のＩＳが、激しく衝突する。
左腰から片口に向かって切り上げた大剣を、鈴の二刀が迎撃する。
大型の近接装備が激突した衝撃は火花を散らし、二機の距離を空けた。

「ち……」

アリーナ全体を生かした空中戦が開始される。剣というには無骨過ぎる刃に柄が付けられた『双天牙月』を鈴音は両手で巧みに操る。
手首を返し、上下左右斜めから自在に斬り込んでくる技術力に黒騎は思わず舌打ちをした。

（久しぶりだな……この感覚ッ）

ぶつかり合う度に、衝撃が、音が、黒騎の意識を細く、鋭く、研ぎ澄ましていく。

「でぇぇやぁ！！！」

「－－－－－ッ！！！」

双天牙月の柄同士を連結させ、薙刀の様に振るう鈴音に対して絶黒のブースト機能を全開で打ち合う。
手数では負ける。ならばその手数を上回る程の反応、対応速度で補う。

「コイツ…！」

刃に視線を一点集中させる。右斜め、切り上げ、薙払い――――――――そこだ。

「はっ！！！」

「ぐっ！？」

身体全体を回転させる要領で渾身の一撃を叩き付ける。
咄嗟に反応するが双天牙月をも軋ませる斬撃に、今までに無い衝突音を上げて鈴音が耐えきれず大きく弾き飛ばされた。

「ッ――調子に…！」

慣性を殺しきると同時に、甲龍の両肩の浮遊ユニットの前部がスライドする。

(来る…！？)

「乗るなぁ！！！！」

黒騎の視界が捉えたのはユニットからの一瞬の光。それが何なのか、理解と解析をする暇も無く、

「がっ――――っ！！！！？」

『見えない衝撃に殴り飛ばされた』

「ぐっ…！」

地面に叩き付けられた黒騎は数メートルの距離をアリーナの土を抉りながら壁に衝突して停止する。予期せぬ衝撃に頭が揺れ、視界が定まらない。

だがそんな黒騎の都合など待つ訳もない鈴音の追撃が目前まで迫っていた。

「悪いけど終わらせるわよ！！」

先程食らった『見えない衝撃』が大小含めて次々に降り注いでくる。肩、脚、腕、スラスター……に面白い程着弾し、それによって生じる凄まじい衝撃が黒騎の体制を正すことを許さない。

「《衝撃砲》かっ……！！」

砲身も砲弾を視認出来ず、空間自体に圧力をかけて『不可視の砲弾』を撃ち出す、それが第三世代兵器《衝撃砲》だ。

「へぇ…記憶力はいいみたいだけど…！！これで、終わりっ！！！！！」

その言葉の次の瞬間。衝撃砲が今までより大きな光を放ち、最大威力で空間を迸った。

「ッ………！！」

轟音。第二アリーナ全域を揺らす程のエネルギーの衝突が黒騎と絶黒に――――――――――『直撃』した。

ACT．5《黒対龍？》（前書き）

決着だぜよ（。□。；）

ACT．5《黒対龍？》

最初の印象は何だか頼りない見た目の男だった。

先程見かけた幼なじみの一夏は昔と比べて背も高く、体も引き締まって男らしかった。それに引き換えもう一人の男性操縦者は背も高くなく、一夏と比べて身体の線も細い。

どうせ中身も見た目通りなんだろうと――――――思っていた。

だが違った。最初は手を抜いた訳では無いが甘く見ていた。武器をぶつけ合う度に、攻撃の鋭さが増し、目つきが変わっていくのがわかった。

コイツは強い。

そう思い知らされると私は間髪入れずに勝負を終わらせに掛かった。長引けば危険だと、代表候補生ともなった実力が叫んでいたからである。

衝撃砲の最大威力。シールドエネルギーはかなり喰ったが確実に黒騎のＩＳは戦闘不能になった筈だ。

――――筈だった。

「ッ！？嘘ッ………！？」

「…………………」

信じらんない。

黒騎と絶黒は、まだ倒れていなかった。

ギシッ…と絶黒の装甲が軋む。衝撃砲を連続で受けた箇所が熱を帯び、白い煙が上がっている。

だがそれだけだ。

あれ程の攻撃を受ければパーツの一つや二つ砕かれるのは当然だが、驚く事に絶黒には傷こそあれど損傷は一切見えない。

既存のＩＳを凌駕するパーツ自体の強度追求による鉄壁の防御力。それが絶黒の二つの開発コンセプトの一つである。

「シールドエネルギーは残り四分の一……次で最後か」

「なんで…直撃受けて無傷なのよ！」

「別に無傷ではない…エネルギーはかなり削られた」

アスクレピオスを粒子に変換、収納。背後に装備された砲身が左腰にスライドされ、外側に有るグリップを左手で掴む。それに反応して砲身中央が稼働、下部が前方にスライドすると全長7メートル程のロングレンジカノンと化す。

荷電粒子砲《月影》

そう名付けられた砲口を空中に浮遊する鈴音に向かって照準する。

「勝負だ」

「ッ……上等……！」

砲身に残りのエネルギーをありったけ送り込む。キィィィッ……と月影の内部が音を上げ、それによって発する熱がバリバリと砲身に紫電を走らせる。

対する鈴音の甲龍も再び衝撃砲の最大出力で向かえ撃とうというのか肩を突き出す形でユニットの前部が開く。

―月影・エネルギーLV2発射可能―

黒騎の目がその情報を読み取った瞬間、左手のトリガーを引き絞った。

そしてそれは、甲龍から衝撃砲が放たれたのと全く同じタイミングでもある。

爆音を上げて発射された大出力のエネルギーの塊は稲妻の様に輝き、不可視の砲弾と激突した。

――――瞬間、アリーナが光に染まった。

ＡＣＴ．６《ルームメイト……って、え？》（前書き）

基本的に戦闘シーンは一気に書けますが日常編は致命的に執筆速度が落ちるのがツバァイの仕様です（ｂ＾ー゜）

ACT．6《ルームメイト……って、え？》

「ふぅ……」

絶黒の調整を終えた黒騎は自室へと戻り、頭からシャワーを浴びていた。温めの温水を頭に受けながら、今日の戦闘の事を何度も頭の中で反復する。

（やはりＩＳでの戦闘はまだまだだな…）

鈴音との模擬戦はいい経験であった。ＩＳ戦闘経験の差、武装使用時の効率、ハイパーセンサーでの状況把握。全てにおいて差を思い知らされた。

―戦闘時間２４分１９秒・勝者『凰　鈴音』―

お互いの大型武装をぶつけ合った後に現れた無機質な表記と事実を思い出す。負けはしたが多くの収穫はあった。絶黒の性能が無ければアソコまで到底保たなかったに違いない。

（…絶黒……俺には分不相応の力だな）

絶黒のスペック、武装を見るに製作者はかなりのＩＳ技術を持った人間に違いないのだが、何故だか黒騎にはその人物の情報は与えられていないのだ。

浴室から出て、用意しておいたタオルで雑に全身から水分を拭き取る。その身体は細めながらもしっかりと引き締まり、至る所に小さな裂傷の跡が見える。

(誰が作ったかは知らないが性能は本物だ……俺に使いこなせるか…？)

左手の指輪を見る。黒い宝石をあしらった絶黒の待機形態だ。

(…いや…やる事はやる……それだけだな)

この後は報告書の作成をしなければならない。無駄な時間を過ごしている暇は無い。頭を切り替えると下の衣服だけを身に付け、髪を拭きながらそこから出る。

ガチャリ。

────部屋の扉が開いた。

『…………………』

沈黙が１０４２号を支配する。

部屋の入り口には、先程黒騎と模擬戦を行った『凰鈴音』が呆然と

立っていた。

「ぎっ……」

「ぎっ…？」

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあッ！！！！？」

ＩＳを部分展開、右腕だけに装甲を纏った鈴音の右ストレートが黒騎に向かって振り抜かれた。

上半身裸の黒騎に向かって。

「…………不覚だ」

目を覚ますとそこには何時もの天井があった。鈍痛がする額をさすりながら身体を起こすと黒騎を殴り飛ばした張本人が突っ立っていた。

「…俺で無ければ死んでるぞ……凰」

「う、ううう、うっさいわね！？というか早く服着なさいよ！？」

「ん…そうか…すまない」

顔を真っ赤にして鬼の様に怒鳴る鈴音の言い付けに大人しく従い机の上にあったシャツを着る。

「…それで何故お前が俺の部屋の鍵を持っている」

ここ１０４２号は相部屋だが黒騎が男というのもあってかルームメイトは居ない。即ち部屋の鍵を持っているのは黒騎以外居ない筈……なのだが、

「あたしも……今日からここに住むのよ」

先程の戦闘の時の態度はどこへやら。鈴音本人も予想外の様に明らかに狼狽した感じで呟く。

「何…？四宮教諭からは何も聞いていないぞ？」

「あたしだって聞いてないわよ！！」

しかし黒騎も表情には出していないがこれが本当ならば少々面倒ではある。報告書や機密データを気軽に観覧する訳にはいかなくなったという事だからだ。

（……まぁあまり大きな問題では無いか…）

少しやりづらくなっただけだ。それに代表候補生ともなればＩＳの知識は豊富な筈だ。何時でも質問出来るのは得と言える。

一般男子なら女子と同室というだけで焦りの一つや二つあってもおかしく無いが、黒騎には『そういった感情』とは致命的と言える程縁がなかった。

「ならば今日から同室か。俺は二神黒騎。よろしく頼む」

「え……あ……凰鈴音よ……――――――――ってそうじゃ無いでしょうがぁぁぁっ！！！！？」

「何をそんなに狼狽えている。コーヒーでも飲むか？」

その数分後、まるで世界の終わりでも知ったかの様な焦りに焦った表情で百合が飛び込んでくるまで鈴音の怒声は部屋に鳴り響いていた。

ACT．7《鈴、一組へと来るの巻》（前書き）

原作があるとやっぱりある程度楽ですね～。セリフは仕方ないとしても表現とかはパクリ過ぎないつもりです

ACT．7《鈴、一組へと来るの巻》

翌日。結局昨日は怒鳴りまくる鈴音と謝りまくる百合のせいで全く報告書を書く暇がなかった。鈴音の機嫌は直らないまま眠りにつき、朝5時に鈴音を起こさない様に部屋を出てＩＳの訓練を行い、現在一組へと来ていた。

「おっ、おはよう黒騎」

「ああ…おはよう」

目的の一夏の周りには箒とセシリアを含めたクラスメイトが居るが気にせず教室へと入る。

「今日の放課後は空いているか？」

「放課後？あぁ…空いてる――――――」

ギロッ！！

「ほ、箒とＩＳの訓練をするつもりだ…」

一瞬箒の目が異常に光った気がしたが気のせいだろう。やけに一夏が震えているが。

「そうか…なら丁度いい。少しだけ俺と戦ってくれ。模擬戦で少し試してみたい事がある」

「そりゃいいが…でも俺よりセシリアの方が良いんじゃないか？代表候補生だし」

話を振られたセシリアは待ってましたとばかりに腰と胸に手を当て自信たっぷりの動きをする。

「一夏さんの推薦とあらばこのわたくしセシリア・オルコットが相手をして差し上げてもいいですわよ」

「そうか…なら頼む」

「ええ……格の違いを教えて差し上げますわ」

「それなら既にわかっている」

「へ………？」

「一応お前にも頼めるか、織斑」

「ああ別にいいぞ」

ポカーンとするセシリアはほうって置いてとりあえずは黒騎の目的は達せられた。ここに居る理由も無い。先程から箒が異常に睨んでいる気がするが気のせいだろう。さっきと同じく。

「ねぇねぇ、二神君のクラスだよね。転校生が来るの」

「ん…ああ。そう聞いている」

帰ろうと思った矢先に女子からここぞとばかりに話かけられる。

「というよりルームメイトになった。昨日から」

『えぇぇぇっ！！！？』

周りに居た数人の声が見事に重なった。

「遂にお前も女子と同室か…頑張れよ」

肩に手を置き、グッと親指を立てる一夏。

「そうかそうか…私と同室は頑張らなければならないのか…一夏」

「そ、そそ、そういう訳じゃないぞ！？うん！！」

確かに鈴音と同室は面倒そうではある。色々と。とりあえずは機嫌を伺っておこう。

「中国の代表候補生だよね？どんな子なの！？」

「気になる気になる！」

この年代の女子は好奇心旺盛と聞くが本当にそうらしい。もう一人の男である黒騎に興味を引かれたのか次々にクラスの女子が集まってくる。

「いきなりクラス代表を変われと言ってくる奴だ」

「うわ……自分の方が強いって事？自信満々だね～セシリアみたい」

「ああ…こんな感じだった」

「みたいってなんですの!?アナタも何同意してますの!?」

「それで結局譲ったのか?」

「ああ。面倒だったしな。何よりアイツの方が俺よりも実力は高いからな」

実際戦ったから分かった事だ。それに代表なんてものは自分の柄では無い。それを変わってくれるならば願っても無い。

「うーん…でも織斑君なら勝てるよね!きっと!」

「クラス対抗戦頑張ってよ〜!」

「フリーパスの為に!!」

「優勝なんて楽勝だよ!」

黒騎からすれば一夏がクラス対抗戦で優勝するのは至難の技だと思う。それは二組の代表ともなった鈴音の存在のせいでもある。一夏が経験不足を埋めて戦うには逆転の秘策でもなければ鈴音に勝つことは不可能であるからだ。

「——それはどうかしらね」

教室の入口、凛と響く声が聞こえる。腕を組み、片膝を立ててドアにもたれているのは黒騎のルームメイト。

「凰…」
「鈴…？お前…鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音！今日は宣戦布告に来たってわけ！」
フフンと小生意気な笑みを浮かべる鈴音に対して一夏は笑いを堪えるといった表情を浮かべた。
「何格好付けてるんだ？すげぇ似合わないぞ？」
「んな…！なんて事言うのよアンタは！！」
一夏の一言で全く似合わない気取った態度が瓦解する。
今にも一夏に飛びかからんと教室に踏み込んだ瞬間、
バシィィンッ！！
見事な程の出席簿アタックが鈴音の頭に振り下ろされていた。
「っ～…！何すんのよ！！？」
鈴音が涙目で振り向く。顔が引きつった。
「ち、千冬さん…！」
「織斑先生と呼べ馬鹿者。もうショートホームルームの時間だぞ、さっさと教室に戻れ。二神もだ」
「はい」

「す、すみません」

さっきとは打って変わってのビビリモードで二三歩鈴音が後ずさると去り際に一夏を睨み付けた。

「また後で来るからね！　逃げないでよ一夏！！」

「ではまたな…織斑」

「お、おう」

猛ダッシュで二組へと走る鈴音に対してのんびりとした歩調で黒騎は一組を後にした。

ACT．8《不穏な気配》（前書き）

先生…戦闘が…書きたいです…

黒騎「知るか」

（。□。；）！！

ACT．8《不穏な気配》

敵意剥き出しの鈴とは結局話せないまま昼休み。一夏に「一緒に飯食おうぜ」と誘われていた黒騎は一足先に食堂へと来ていた。

「………………何でアンタが居るのよ」

「織斑に昼食を誘われたからだが…」

割と早く鈴と話す機会がやってきた。相変わらず猫みたいに目をつり上げて睨んでくるが。

「そういえばまだちゃんとした礼を言っていなかったな…昨日は助かった。お陰で絶黒の調整が済んだ」

「別に…クラス代表変わってもらったし」

「…ふむ。一つ聞かせてくれ」

「何よ」

「何故怒っている？」

「…………………………」

黙った。何故だろうか？自分としては鈴と出会ってからの数十時間で気に障る行動をとった覚えが無いのだが。

「…別に怒ってないわよ」

「そうか。ん――来たか」

「おっ、黒騎に鈴」

入口近くで話していると漸く一夏達がやって来る。偉く大人数だ。十人近い人数が集団で移動しているのが珍しいのか、それとも学園で二人だけの男が珍しいのか周りの視線が集まる。

「待ってたわよ一夏！遅いのよ来るのが！」

「何で早く来なきゃいけないんだよ…」

一度も利用した事の無い黒騎は一夏に習って日替わりランチを購入する。すると何故か一夏と鈴を二人で座らせ黒騎を含めた残りは一つのテーブルに座るといった奇妙な光景が生まれる。

「……何故隣のテーブルに座らないのだ……狭い」

「アハハハ…ゴメンね～二神君」

「ほら…気になるでしょ？織斑君とあの子がどんな関係なのかさ！」

「一緒に居たら話しにくいじゃん。だからだよ」

「そういうものなのか…」

先程から異常に隣のテーブルに聞き耳を立てている一夏の幼なじみ

とイギリス代表候補生を見ながらポツリと疑問を口にする。

「惚れているのか？織斑に」

『ッ――――――！！！！？』

テーブルを囲っている何人かが顔を引き吊らせる。

「な、なな、何を仰ってますの！？」

「そんな訳が無いだろう！！」

黒騎の隣居たならば掴み掛かっていたという程の勢いで箒とセシリアが怒り（？）に顔を真っ赤にして否定する。

「二神君って……ストレートっていうか…」

「天然？」

『うんうん』↑（めっちゃ頷く女性陣

「どういう意味だ？その天然というのは」

「えーっと………た、大した事じゃないよ」

「そうか…ならいい」

さしたる興味も無くなったのか、いい焼け具合の鮭を解す黒騎に女性陣は苦笑いを浮かべるしかなかった。

放課後。一夏とセシリアとの約束がある第三アリーナへと黒騎は向かっていた。

先日の鈴との模擬戦で使用した武装は《蛇座》と《月影》。残りの武装にも慣れておかなければ絶黒を使いこなす事は出来ないだろう。

「しかし…やけに拡張領域（バススロット）の容量が高いな…」

手元に展開した絶黒のスペックデータを見て呟く。拡張領域が高いと言うことはそれだけ後付武装（イコライザ）にバリエーションを持たせる事が出来るという事なのだが、基本装備だけでもある程度の戦闘に対応出来る絶黒にはかなり持て余してしまうのだ。

「…グレネード…いや、ブースターで機動性を…」

黒騎としては後付武装を付ける位なら絶黒の劣悪な機動性をなんとかしてほしい所だ。足回りが軽快なＩＳならばライフル一つで完封されかねない程である。もっとも、それについても対策はしているのだが。

そうこう考えている内にアリーナの入口が見えてきた。一夏とセシリアとの模擬戦だ。集中しなければ完敗をしかねない。

端末を閉じ、入口へと踏み込んだ瞬間。

『…クス……』

「ッ！！！？」

寒気がする悪魔の冷笑が、聞こえた気がした。

いや、確かに『聞こえた』。

そしてそれは、『黒騎に対してのものだ』。

鳥肌が立つ。背中から冷水を浴びせられたかの様な寒気が黒騎の意識を一瞬で切り替える。

地を蹴る。体制を低く、滑る様な速度で黒騎は駆ける。曲がり角、この付近から気配があった。

「キャッ！？」

「ッ！？」

そこを曲がった瞬間、誰かと衝突する。短い悲鳴を上げて手元の紙や本を床に落とすこの人物が黒騎の目標だと思ったが直ぐに間違いだと察する。

「ふ、二神君！廊下は走っちゃいけませんよ！」

二組の担任、百合だった。赤縁眼鏡をかけ直しながら百合からは先程感じた『嫌な感じ』はしない。

「すみません…四宮教諭」

逃がした。いや、気のせいか？あれは黒騎の感じた錯覚だったのかもしれない。

だがじっとりと濡れた背中は、静かにそれを否定していた。

ＡＣＴ．９《放課後》（前書き）

先日感想にて指摘をして下さった方。返信をしようとしたら消去されてましたがツバァイ的には『よっしゃーどんなのでも来いやぁ！』な感じなんで他の方も疑問があれば遠慮無しに指摘して下さいね（ ´∀｀）

ACT．9《放課後》

「すまない…遅れ――――――――……………なんだコレは…？」

「おおっ！！く、黒騎！助けてくれ！！」

百合に謝罪をして目的のアリーナへと来たのは良かったが、そこは既に戦場と化していた。

「えぇい！！逃げ回る事しか脳が無いのか貴様は！！」

「無茶言うなよっ！？」

日本国産の量産ＩＳ、《打金》に装備された刀型ブレードを箒が振り下ろす。

避ける一夏。

「反撃の一つも無いと訓練の意味がありませんわよ？一夏さん」

「そんな暇あるかっ！？」

ブルーティアーズのロングレンジライフルが無慈悲に一夏を狙撃する。

逃げる一夏。

残酷なまでの二対一が繰り広げていた訳だ。

「死ぬっ！マジで死ぬっ！！ＳＯＳ！ＨＥＬＰ　ＭＥ！！救急車――っ！！」

「最後のは怪我しないと意味無いぞ」

普通ならばリンチともとれるので乱入してもいいが箒とセシリアの額に青筋が出ているのでどうせ一夏が怒らしたんだろうと判断する。

「織斑」

「なんだ！？」

「俺は向こうで射撃訓練をしているから終わったら呼んでくれ」

「いや助けろよっ！！！？えっちょマジで！？黒騎！？黒騎さん！？黒ちゃ――――んっ！！！？」

チュド――――ン！！

何か後ろで爆発音が聞こえるが大丈夫だろう。

一夏の悲鳴と爆発音をバックに黒騎は黙々と射撃プログラムを始動した。

「裏切りものぉぉ――――――――――――――――っ！？」

「……何がだ…」

最もである。

「では今日はこのあたりで終わる事としましょう」

「お、おう…」

ＩＳを解除したセシリアが余裕のある表情で這いつくばる一夏に告げる。数時間の訓練にてもう空はすっかり暗くなり、星が出ている。

一夏に一言告げ、セシリアと箒が先に部屋へと戻る。まだ息絶え絶えの一夏に付き添って数分後に黒騎と一夏はピットへと帰還する。

「マジ疲れた…あの二人は手加減ってものを知らないのか…」

「いい訓練になっただろ？」

「んなワケあるか！！？」

一夏はこう言うがあの二人の猛攻を捌いただけでも大したものだと思う。やはり一夏はセンスがいい。ＩＳ歴が一夏と変わらない自分が言うのもアレだが着実に力をつけていっているのは確かだ。

「一夏っ！！」

黒騎が部屋に戻ろうとした時、目の前のドアがスライドする。待ってましたと言わんばかりにそこに居たのは黒騎のルームメイトの鈴だ。本人はまだ嫌がっているようだが。

「そこどいて」

「ああ…すまない」

不機嫌顔で言われては従うしかない。横にずれると持参していたタオルとドリンクを黒騎に向けたのと真逆の表情で一夏に渡す。

「サンキュー。あぁ…生き返る…」

「ドリンクは冷たすぎないので良かったよね？若いくせに体の事ばっか気にするのは変わんないね」

「若いうちから不摂生したらいかんのだぞ。クセになるしあとで泣くのは自分と自分の家族だ」

「ジジくさいよ」

「う、うっせーなぁ…」

幼なじみというだけあって一夏に鈴は見透かす様な眼で微笑む。その態度に照れたのか、頬を赤くした一夏は手元のドリンクを黒騎に投げた。軽く片手で受け取った黒騎は一夏に向けて首を傾げる。

「なんだ？」

「お前も水分とっとけよ、黒騎」

「…………………」

一夏にとっては照れ隠しでやった行為なのだろうが、受け取った黒騎をもの凄い目つきで睨む鈴の視線からして飲まない方がいいだろう。

てか飲んで今後鈴との仲が悪くなれば面倒だ。

「これは凰がお前に持ってきたものだろう。お前が責任を持って飲め」

「お、おう」

「ではまたな。織斑」

そう言って投げ返すと黒騎はピットを後にする。

「やはり俺は凰に嫌われているのだろうか…？」

先程の態度からしてそんな気がする。黒騎としては面倒な事態にならなければ構わないのだが。

その時の黒騎は『面倒な事態』が遠からず起きるとは予想もしていなかった。

ＡＣＴ．１０《あながち間違いでは無い》（前書き）

お待たせしました〜。携帯の調子が悪く、修理したり色々してたら遅くなりました！

次からは振り切るんで見捨てないでね〜

ACT．10《あながち間違いでは無い》

部屋に戻り、シャワーで汗だくの身体を洗うと頭を拭きながらベットに倒れ込む。

「……凰の奴…帰って来ないな」

一応はルームメイトなので居なければ居ないで何かあったのだろうかと一瞬考えるが、すぐさまここが世界一安全な学園だと思い出す。というかあの凶暴な性格に手を出す奴はそうは居ないだろう。

それよりも…だ。

(問題はあの時感じた気配…)

アリーナへと向かう途中で感じた刺すような寒気を感じる視線。アレは確実に自分と同じ………『コチラ側』の気配だった。

(俺の正体を知っている奴…同業者がここに居る…？)

そう仮定すると、考えられるのは黒騎と同時期に学園に来た人間……生徒が一番怪しい。

(だが俺と同時期に来た人間など無数に居る…あまりここで個人情報を探るのも限界がある)

結論から言うと今の黒騎には幾らでも予測は立てられるがそれを証明に足る情報を得る術が無いということだ。

「ちっ……面倒な…」

思うように動けないのがこんなにも歯痒い。不安要素は直ぐに片付けなければどういう結果を齎すか分からない。

苛立ちが募ろうがどうしようもない。コーヒーでも煎れようと立ち上がった時、

バァァンッ！！

壊れるかと思う程の勢いで扉を開けて鈴が帰って来た。

「あぁもうッ！！ムカつく一夏の奴っ！！！」

「……随分荒れてるな…」

「何か言った！？」

「別に……」

あの眼光を一夏がマトモに受ければストレスで胃に穴が空くんじゃないだろうかと思える程黒騎を睨む。黒騎からすれば八つ当たりとっても良い位だが残念ながら黒騎自身、怒るという感情を『知らない』のだ。

「どうかしたのか…」

「別に！アンタには関係ないでしょ！！」

「ふむ…」

何時ものコーヒーにミルク、砂糖を少し多めに入れ、ベットに横たわり枕を抱える鈴に差し出す。

「何よ…」

「まぁ飲め…」

ムスッとした表情は全く変えずに、身体を起こして乱暴に引ったくると一口飲む。途端に適度な温かさで、程よい甘さとコーヒー独特の苦味が口に広がり、ポツリと一言漏れる。

「…おいしい……」

「……そうか」

自分はコーヒーは全く飲まないのでよく分からないがこれが美味しいという事は分かる。何食わぬ顔で壁にもたれてカップを傾ける黒騎を見ると不意に洩らした一言に罰が悪くなり、顔を逸らしてまた一口飲む。

「何があった…どうせ織斑関係だろうが…」

「何で言わなきゃならないのよ」

「…そのコーヒーの代わりとでも思え。何時までも機嫌が悪くては

俺が参る」

「む……」

実際高ぶっていた苛立ちが少し落ち着いたのは確かなので反論のしようが無い鈴。

「というかさぁ…なんで一夏のせいだと思うのよ」

「ん…？『お前が織斑に好意を持っているだろうと思った』からだが…」

「な…!？い、いい加減な事言わないでよね！？」

二度目の質問は偶然にも箒とセシリアと同じ答えだった。

（…ことごとく俺の勘は外れるな…やはりよく分からん）

顔を真っ赤に染める鈴の慌て様を見れば疑問は遠からず外れてないと予想できるが残念ながら黒騎はそこまで『勘が良くなかった』。

ＡＣＴ．１１《機嫌回復？》（前書き）

１２月にＩＳのＯＶＡ出ますね…最近知りました。

買った方がいいのだろうか…

ACT．11《機嫌回復？》

「…成る程な。お前は織斑と同室になろうと部屋へ行き、その時に『昔の約束』について話したが織斑は意味を履き違えて覚えており、それが気に入らない……という事だな」

「…そうよ」

因みにその約束とは、

『料理が上手くなったら自分の酢豚を毎日食べて欲しい』

というのを一夏は、

『料理が上手くなったら毎日酢豚を奢ってくれる』

と捉えていたらしい。

「それで口論になり、『勝者が敗者にどんな命令でも出来る』という事でクラス対抗戦で決着をつける事になったと」

「その通りよ！　あぁもう！　思い出したら腹立ってきた！」

鈴が八つ当たりに手元の枕をボフボフと殴りつけ、新品の枕が無惨にシワだらけになる。不意に手を止め、枕に顔を埋める。

「ほんと…最っ低っ…一夏の馬鹿…」

弱々しく呟くその姿は雨にうたれた子猫の様に、沈んでいた。
一夏が居れば慰めの言葉でも掛けれるのだろうが自分にはその様な言葉など浮かんでこない。

だからこうしか言えない。

「だから謝らせればいい…」

「えっ…？」

枕から顔を上げる鈴を真っ直ぐに見詰め、やるべき事を言葉にして紡ぐ。

「説明などどうする必要など無い。お前が織斑を叩きのめし…頭を垂らさせればお前の勝ちだ。その為のクラス対抗戦だろう」

「それはそうだけど…」

「約束は言わば誓いの様なものだ。それを勘違いなどする詰まらない奴に思い知らしてやればいい。お前の力で、その約束の重さを…な」

「…………………」

自分に出来るのは事実を確認させる事だけだ。それに一夏が代表候補生の鈴とどう戦うのか興味がある。約束などどうでもいいのだ、黒騎にとっては。

そんな黒騎の心中を知るよしも無い鈴は、クスッ…と口元を僅かに綻ばせる。

「そうね…アンタの言うとおり、一夏が悪いんだから絶対に後悔させてやるわ。このあたしの手でね！」

「…そうか」

「暗い奴だと思ってたけどいい事言うじゃない、『黒騎』」

「誰が暗い奴だ…」

また一口コーヒーを飲む。今日もまた、報告書は書けそうになかった。

（それにしても……『食べて欲しい』を『奢る』と勘違いしただけで怒るとは……最近の女子は沸点が低いのだろうか…？）

当たり前だが、一夏が分からなかった事を黒騎が分かる筈も無く。

約束の『本当の意味』を黒騎は知る由もなかった。

次の日の昼休み。相変わらず周りに女子の包囲網を敷く一夏の居る一組へと訪れていた。

「なぁ……やっぱ鈴凄い怒ってたか？」

「ああ。俺と枕に八つ当たりする程度にはな」

「だよなぁ…」

ハァ…　と溜め息をついて机に突っ伏す一夏。

「なんにせよ…早く解決するんだな」

「うーん…でも謝るのはなぁ…」

今度は唸りだす一夏。色々葛藤があるようだが一夏も一夏で譲れないものがあるようだ。

「まぁ…直ぐにとは言わないが、対抗戦の後にでも一度謝っておけ。理由を言わない凰もだが、そもそもはお前が約束をちゃんと覚えていないのが発端だ」

「…わかってるよ」

「ちゃんと覚えられてても困るのだが…」

「箒さん何かおっしゃいました？」

「いや…なにも」

箒とセシリアのやり取りは黒騎と一夏には聞こえていなかった。

ＡＣＴ．１２《日に油》（前書き）

若干短いけど次回からバトルパートなんで堪忍な！！

ACT．12《日に油》

それからというもの、一夏と鈴の仲が戻るという事はなかった。

「あ…鈴…」

「…………ふん」

→ものっ凄い睨んで去る鈴。

「あ…り——」

「……………………」

→めっちゃ無視。

「あ——」

「さっさと来なさいよ黒騎！！」

「何故俺にキレる…」

廊下ですれ違う時は勿論、食堂や合同授業の時も『はぁ？話しかけないでくれる？土下座するなら許してあげてもいいけど？』という言葉が読み取れる様な不機嫌モードが続いている訳だ。

ズルズルと首ねっこを掴まれ引きずられる黒騎。因みにここは一年の教室が並ぶ廊下。小柄な鈴に学園で二人だけの男が引きずられるという光景は周りの女子生徒の目を引くのは充分である。

「ねっ…なんで二神君引きずられてるの？」

「さぁ？でも凰さんと同室らしいよ」

「うーー…いいなぁ…」

同室であるが故に鈴と朝飯をとる事になっており、部屋から出た途端に一夏と遭遇。今に至る訳だ。

(本当に頑固だな…コイツ…)

一夏のとばっちりで明日には変な噂が学園に広まっているに違いない。

心の中で黒騎は誰に知られる事もなく溜め息をついた。

「………凰」

「なによ」

「まだ怒っているのか？織斑に。いい加減に仲を直してもらわんと俺が面倒なんだが」

「うるさいわねぇ……アンタには迷惑かけてないでしょが」

（コイツ本気で言ってるのだろうか…）

「その目はなによ…」

「別に…」

一夏の話題を出せばこれだ。取り合う暇も全く無い。だがそれも明日の対抗戦で終わる…筈だといいのだが。

「明日の対抗戦では焦ったら足元をすくわれるぞ」

「はぁ？私が一夏なんかに負けるとでも思ってんの？あんな初心者に」

「だからだ。だからこそ織斑は『何か』狙ってくる筈だ」

「何かって何よ」

「…知らん」

「じゃあ言うなぁっ！！」

ガタァン！！と一気にラーメンのスープを飲み干して器をテーブルに叩き付けると黒騎を一睨み。そのまま食堂を出て行った。

「……織斑ではあるまいし…何をしている……俺は」

自分の忠告は鈴の神経を刺激しただけだったようだ。ツインテールを揺らして去る後ろ姿を眺めながら黒騎は日替わり定食を掻き込んだ。

クラス対抗戦まで、あと1日。

ACT．１３《黒、動く》（前書き）

更新遅くてスミマセン（笑）

もうちょい早めを心がけますね…（。□。；）

ＡＣＴ．１３《黒、動く》

「ふむ…流石は一年屈指の好カード…アリーナは満席か」

空間に浮かぶリアルタイムモニターにはアリーナの客席の映像が映っている。客席の中央、周りよりも一段階高く設けられたそこには各国のＩＳ関係者が椅子に座り、アリーナでの戦いの時を待っている。

（……政府の人間は……居ないな）

そこに座る面々を一瞥し、黒騎の関係者が居ないことを確認する。外部からの人間が出入りするこのタイミングならば政府とも接触が出来ると考えていたが甘かったようだ。

女性の様に細い指が空間コンソールを操作し、モニターが消える。ふと視線を感じ、そちらへと振り向く。

「なんだ…凰」

「なんでアンタがここにいるのよ…」

桜色のＩＳスーツを身に纏い、既に専用ＩＳ『甲龍』を展開している鈴が黒騎にジト目で視線を向ける。

ここはアリーナのピット。二組代表の自分がここにいるのは分かるが黒騎が居る理由は全く鈴には分からなかった。モニターを見てぶ

つくさ何か言っていたがそれが理由なのだろうか？

「…別に気まぐれだ。織斑側に篠ノ之とオルコットが居るのだから俺がここに居ても問題ない筈だ」

「まぁそれはそうだけど…」

「一人ぐらい…お前の味方がいても良いはずだ」

「………………」

何時もの無表情で言った黒騎の言葉に一瞬何も言えなくなる。

あぁ……本当にコイツは何を考えているのか分からない。誰かに興味が無いような人形みたいな奴だと思えば時折人間じみた言葉を投げかけてくる。

「アンタって本当におかしな奴よね」

「……そうか。お前がそう言うのならばそうなんだろう」

「……プッ」

「何故笑う…？」

「べ、別にぃ」

思えば自分は黒騎に初日から怒ってばかりだった。なのにここまで付き合う所はどこか一夏と似ている気がする。

首を傾げる黒騎に笑いを堪えながら甲龍をカタパルトへと乗せる。

「黒騎」

「なんだ」

「終わったら珈琲煎れなさいよね」

「ああ……構わない」

数週間で募っていた苛立ちが、何時の間にか消えていた。

カタパルトが稼働、鈴と甲龍がピットから高速で射出される。ＩＳ戦での余波を防ぐ為にピットの入り口のシャッターがゆっくりと降りてくる。

「…………さて」

シャッターの稼働音を聞きながら、黒騎が振り向く。

その表情は、既にＩＳ学園一年生『二神黒騎』ではない。

「居るんだろう…そこに」

冷たい、刃物の様な鋭利な瞳。

「邪魔をするなら消す…それだけだ」

二神黒騎の『裏』。

凍える様な、寒気を帯びた殺気が黒騎の全身を撫でる。

戸惑いは無い。脚を曲げる。引き伸ばすと同時に黒騎は殺気のある方へと加速した。

ＡＣＴ．１４《黒、参戦する》（前書き）

多分次回は早めに更新出来る………と思う

ACT．14《黒、参戦する》

頭を下げた低い体勢から連続で突きを繰り出す。風を切る音を率いる拳を最小限の動きで回避する『殺気の主』。

「……――！」

右足を踏み込むと同時に左脚が唸る。小柄な身体からは想像出来ない程の威力を持つ一撃は虚しく空を切った。しかしそれが両者の距離を広げ、お互いが見合う。

黒騎は左足を引き、手を下げた構えで目の前の障害を改めて見る。

それは、仮面と白衣を纏った奇妙で異質で不可解な姿。

道化師を思わせる白い仮面で顔を隠し、黒い衣服の上には白衣を羽織っている『敵』。そう、この者があの時感じた殺気の主だということは分かっていた。

「…クス……強いねぇ…キミ」

「お前……何者だ」

変声機でも使っているのか仮面の向こうから聞こえる声は高いのか低いのか、男なのか女なのか判断する事ができない。

「ッ…！」

質問の答えを聞く前に、既に黒騎は真横に跳んでいた。

ダァンッ！！という『銃声』が聞こえるのと同時に黒騎の居た足下に銃弾が突き刺さった。

駆ける。駆ける。駆ける。

それを追う様に一瞬置いて銃声が何度も鳴り響く。

「ちっ…」

ＩＳの部品や工具が並ぶ物陰へと滑り込む。応戦しようにも銃を持って学園で過ごす訳にもいかず、黒騎が身に付けているのは護身用の小型ナイフだけだ。

懐から取り出し、逆手に構えて壁の向こうの出方を待つ。

「かくれんぼ？けどいいのかなぁ……グズグズしてると『キミの観察対象』が死んじゃうかもよ…」

「…！？」

それを現実にするかの様に、突如轟音がアリーナから鳴り響く。

「なに……」

ピットまで聞こえる程の轟音と衝撃を齎す武装を、黒騎の知る限り戦闘中の一夏と鈴のＩＳには　装備されていない筈だ。

そう、だとすれば。

「………お前の仕業か…」

「まっさかぁ♪『この件』については私は無関係だよ。きっとどこかの天才がちょっかい出しに来たんじゃないの」

「…ふざけてるのか」

まるでこの状況が楽しくて仕方ないといった感じが、無機質な声色からでも分かる。

「クス…さぁ君はどうするのかなぁ？『黒騎ちゃん』」

「ッ…！？」

物陰から飛び出して左手が煌めく。銀に光るナイフは空を切り、壁に当たって落下する。

カラァン…、と黒騎しか居なくなった空間にナイフの落ちた音だけが響く。

「………不愉快だな…」

『黒騎ちゃん』

その言葉を聞いただけで鳥肌が立った。

まるで黒騎の身体自体がその言葉を聞くのを拒むかの様に。

「なっ…」

”瞬時加速”《イグニッションブースト》で一か八かの勝負に出ようとした瞬間、それは予期せぬ来訪者によって止めざるをえなかった。

突然の異常自体に理解出来たのは一つだけ、

アリーナの遮断シールドを破って『何かが』侵入して来た…という事だけだ。

「一夏！試合は中止よ！直ぐにピットに戻って！」

鈴を映したモニター、プライベートチャンネルが目の前に出現する。先程まで戦っていた鈴の焦り様からもただ事では無いことが明らかである。それを確定させる様に、白式のハイパーセンサーが一夏に緊急の知らせを伝える。

――ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。

『ロック』されています。

「ロックされている…？俺がアイツにロックされているのか…！？」

アリーナ中央から爆煙の先にいる正体不明のＩＳを見て呟く。

アリーナのシールドを破るには凄まじい破壊力が必要だ。セシリアのライフルや鈴の衝撃砲よりも遥かに。

『即ちそれだけの破壊力を持つＩＳに攻撃対象としてロックされているのだ』

「一夏！早く！」

「お前はどうするんだよ！」

「あたしが時間を稼ぐからその間に逃げなさいよ！」

一夏の中の、男心が揺さぶられる。

「逃げるって…女を置いてそんなこと出来るか！」

「馬鹿！アンタの方が弱いんだから仕方ないでしょうが！！」

「う………」

そう言われれば返す言葉も無い。無・い・の・だ・が・！！！

納得など出来る筈も無い。

言い返そう、その瞬間。

目の前に『黒』。

「逃げるのはお前達二人だ…」

無表情なもう一人の男が、二人の前に飛翔した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6955w/

-IS-インフィニット・ストラトス《夜を率いる弾丸》

2011年11月4日03時19分発行